

---

# バカとメダルとIS学園（試作）

キラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとメダルとIS学園（試作）

### 【Nコード】

N4393T

### 【作者名】

キラ

### 【あらすじ】

ISを使う男はもうひとりいたのだー（棒）：使い古された設定ですみません。ついで言うところの作品は試作品だからすぐに終わるということも申し訳ありません。ぶっちゃけてしまうと受験勉強でなかなかいつもの作品を執筆できる状況にない駄目作者が息抜きに書いたネタ小説なのです。主人公の機体は絶賛放送中の仮面ライダーオーズが元ネタです。原作1巻のセシリア戦まで書く予定なので、よろしかったら読んでくださるとうれしいです。

## 第一話 入学とオーズと俺の欲望 part A (前書き)

初めての方ははじめまして。そうでない方はおはこんばんにちは。キラと申します。言いたいことはあらずじに全部書いてあるので、早速本編に突入します！

## 第一話 入学とオーズと俺の欲望 part A

今この文章を読んでいる全ての男たちに聞こう。

お前ら、女は好きか？

俺は大好きだ。美人の彼女が欲しい。デートの待ち合わせの時とかに、スカート履いた状態でくるつと回って「おまたせっ」とか言っ  
てほしい。キスしたい。ゴスロリ着てほしい。おっぱい揉みたい。  
抱き合いたい。(ピー)したい。××もしたい……

そう、そうなんだ。大方の思春期男子の例にもれず、俺も女に飢え  
た獣のひとりなわけだ。

そんな俺が今、自分でも信じられないことに、無性に男が恋しくな  
っている。男友達の偉大さを誰かに向けて演説したい気分に乗ら  
れている。CLANADの春原とかアガミの梅原とかの素晴らし  
さを猛烈に叫びたくてしょうがない。

なぜか？理由は単純明快、俺の置かれた状況を説明すれば一目瞭然  
だ。

なんでクラスメイトが女ばっかなんだよおおお！！

そう、俺が今日入学した高校はちよいと……というかかなり特別で、基本女子しか生徒がいない。もちろん教職員も全員女。

というのも、ここは超強力人型汎用最終決戦兵器（勝手に命名）であるIS（正式名称はインターナショナル・セクレタリー。ちょっと間違ってるかもしれないが）のパイロットを育てる世界で唯一の機関であり、そのパイロットはどういうわけか女性にしか務まらないのだ。だから必然的に生徒も全員女性……のはずだった。

「なーんでこうなっちゃったのかねえ……」

副担任の山田先生とかいう人が何かをしゃべっている中、俺は苦々しくつぶやきながらある生徒の方を見つめる。

不幸中の幸いと言えるのかどうかはわからんが、男子生徒は俺の他にもうひとり　織斑一夏という奴がいる。……あ、ちなみに俺の名前は橘映司な。

実は一夏とは何年も同じ屋根の下で暮らしてきた間柄で、俺もあい

つがいてくれればこの先なんとかなるような気がしている。……と  
はいえ、やはりもつと男子がいてほしいのは確かだ。さすがに女ば  
かりじゃ息が詰まる。

一応俺達2人がこのIS学園に入学する羽目になった経緯を回想し  
ておこう。

2月のこと。俺と一夏は同じ高校を受験しようとしていた。まあお  
互い普通に受ければ合格する程度の学力はあったから、順当に行け  
ば今頃その高校で普通のスクールライフをスタートさせていたこと  
だろう。

さっき言った通り俺と一夏は同じ家に住んでいたのも、当然一緒に  
受験会場へと向かったわけなんだが、そこで問題が発生した。

「おい、どうする映司。中3が2人して迷子っていうのはさすがに  
笑えないぞ」

「そうだな、いつものお前のくだらんギャグより笑えないな」

会場では複数の高校が試験を行っていたのだが、その会場の構造が  
無駄に入り組んでいたせいで俺達は目的地の場所がわからなくなっ  
てしまった。

誰かに聞くのも情けないと感じて、テキストに進んでいった結果、  
ある部屋にたどりついた。そこにISが置かれていて、どうせ動か  
ないからと思っ、俺達は軽い気持ちで触れて……その時不思議な

ことが起こった。

あの時IS学園の試験会場に行きさえしなければこんなことにはならなかったんだ。そうだ、今の状況を作った原因は

「お前のせいだ」

俺が恨みを込めて発した一言は、見事に一夏の言葉とはもってしまつた。どうやら向こうもちよつど同じことを考えていたらしい。

「何言つてんだ一夏。お前があの時右に行こうと言わなければこんなことにはならなかったんだぞ」

「お前こそ何言つてんだ。その前の分かれ道で左に行くつて言ったのは映司だろ？元をただせばお前の方が悪い」

「いやお前が悪い」

「いやお前だ」

「あ、あのう…」

SHR中に突然口喧嘩を始めた俺達に対して山田先生が何かを言ううとしていたが、周りがほぼ女でストレスが溜まっていた俺達はそんなものでは止まらない。そうだな、止められるのは『あの人』の鉄拳制裁くらい

パンツ！パンツ！

「いつ」

「ひでぶっ！」

突如頭に襲ってきたその一撃に、俺と一夏は反射的に声をあげる。

パンツ！

「いてえっ！」

変な悲鳴を上げたからだろうか、俺だけ2回叩かれた。…ってそれよりも！この攻撃の感触、俺も一夏もよく知っている！

「げえっ、関羽!？」

「恐怖の大王ガノンドロ                   !」

パアンツ!パアンツ!

ああ悲しきかな。ボケる前にツッコミを入れられてしまった。ネタが面白ければきちんと最後まで待ってから容赦なく脳細胞を殺してくれるのに。

というわけで、目の前に立っているのは一夏の実の姉であり俺にとっても姉同然の御方、織斑千冬さんだった。路頭に迷っていた小4の俺を拾って自分の家に住まわせてくれるような心優しい人なんだが、問題があるとすればデレがほとんどないところか。ツンツンツンツンデレくらいの配分だ。

パアンツ!

……ついでに言うと、人の心を読むのも勘弁願いたい。

「はあ……」

時は過ぎ去って2時間目終了後。俺と一夏はぐったりと机に突っ伏していた。ちなみに席は隣同士。この辺は配慮してくれたんだろうか。

「さっぱりわかんねえな……」

「そうだな……」

俺のつぶやきに一夏もうなずく。俺達は元々IS学園に入学する気なんぞさらさらなかったわけで、ISに関する知識なんてまったく持ち合わせていなかったのだ。…端的に言えば、授業についていけない。一応、入学前に参考書はもらっていたのだが、一夏は夕ンページと間違えて捨て、俺はというと『マニュアルなんて読まなくても感覚でイける』とか誰かが言っていたような気がしたので読んでいなかった。

まあ、それはそうとして。

「ときに一夏よ。相変わらずお前はモテモテだな」

「はあ？いきなり何を言い出すんだ」

まったくこいつは…これだから鈍感モテ野郎はむかつくんだ。

「篠ノ乃だっけ？また随分と美人な幼馴染を持っていてるじゃねえか」

窓際の席に座っている篠ノ乃箒という女子は、一夏の幼馴染らしい。俺が来る前にあっちが引越してしまったとかで、一夏が会うのは6年ぶり、俺が見るのは初めてだ。

「そりゃ箒は美人だと思うけどさ…別に俺を好いてるってわけじゃないんだから」

「どーだかな」

長い付き合いの俺は知っている。一夏は異常にモテるということ。まあイケメンだし運動もできる方だし性格も悪くはないし家事もできるし…あれ、考えてみたらモテる要素しかなくね？

そんなわけで、中学時代はよく切ない気分になったものだ。だってそつだろ？友達がモテる奴だと結構辛いぜ？でもそのことを友達の

五反田に話すと「お前にだってあいつが……」などとよくわからないことを言われながらな冷めた目で見られたのはなぜだろう。よくつるんでいた女子の鳳鈴音に愚痴った時も「……あんたも同類だけどね。この馬鹿」とか言われた。

「ちょっと、よろしくって？」

俺があの中の友人2人の言葉の意味を考えると、急にひとりの女子の声の上から降って来た。なんだ？と思えば顔を上げると、そこに立っていたのは金髪で白い肌の、いかにもええところ育ちのお嬢様といった感じの少女だった。あ、ちなみにこの学園、生徒のほぼ半数が外国人だからいきなり白人が話しかけてきても驚きはしないぞ。

「ん？何の用だ？」

どうも俺と一夏の両方に話しかけてきたようなので、とりあえず返事しておく。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

……あー、なるほど。こういうタイプの奴か。参ったな、俺はMじゃないからこの手の高飛車な女にはついつい反抗的になっちまうん

だ。

「そーかいそーかい、そりやすみませんでした。ところであんた誰？」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

……まあ、後のやり取りは大体想像できるだろう？まず一夏が「代表候補生って、何？」という質問を繰り返し、その後も俺と2人でオルコットの神経を逆なでするような発言を繰り返した。そのうち授業開始を告げるチャイムが鳴ったことで、オルコットは渋々引き上げていった。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

3時間目は千冬さんが教壇になって授業をするらしい。山田先生もノートを取っているところを見ると大事な話なんだろうな、多分。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦？そんなもんがあるのか？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

クラスがざわめき出すが、事情を知らない俺と一夏はついていけない。まあ、要するに学級委員みたいなもんなんだろう。だったらごめんだ。中学の時組織票で俺を学級委員にして雑務を押し付けたクラスメイトども、俺は今でもあの時のことを恨んでいるからな。

「はいつ。織斑君を推薦します！」

「私も織斑君がいいと思います！」

「私も！」

「じゃあ私はあえて橘君で」

ある程度予想はしていたが、一夏に推薦が集中しているな。つか最後の奴、『あえて』ってなんなんだ馬鹿にしてんのか。入学初日か

ら早くも人気の格差が生まれちまつてるぜ……

「お、俺！？」

ようやく自分が推薦されていることに気づいた一夏が立ち上がる。まあ諦めるんだな。俺は自分がならなきゃ誰が代表になるうと構わない。男同士の友情とはなかなかドライなのだ。…決して女子に人気なのを妬んでいるわけじゃないぞ。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

と、ここでバン、と机を叩いて立ち上がったのは高飛車エリートのアールコットだ。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・アールコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

おお、なんとという女尊男卑。聞いてるこっちがイライラしてくるね！

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までES技術の修練に来ているのであって、サー

カスをする気は毛頭ございませんわ!」

極東の猿っついでいつの時代だよ。戦後の日本の発展を知らんのかこいつは。つか、イギリスも偉そうにするほどいいところあったか?もしかしてオルコットの脳内では産業革命あたりで歴史が止まっているんじゃないだろうか。

「いいですか!? クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!」

「大体! 文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……!?!?」

多分無意識のうちに一夏の口から出たその言葉は、オルコットを激怒させるには十分だったようだ。ついでだ、俺も言いたいことを一言言っておこう。

「いいかオルコット。日本には素晴らしい文化があるんだ。週刊少年ジャンプに松任谷由実。まさにすばらしいっ!」

「いやお前も日本の文化わかってないだろ」

一夏が呆れたような視線を送る。ん？なんでだ？

「何言ってるんだ一夏。ジャンプ最強だしユーミンも最高だろ。…あ、あと日本は豊かな四季とか和の文化とかあるな」

「なんでそつちがついでみたいな言い方なんだよ!？」

「あなた達！わたくしの祖国を侮辱していますの!？」

と、俺達の日本文化に関する口論に割って入ってくるオルコット。そうだった、クラス代表の話をしてたんだっとな。

「決闘ですわ!」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

どうやら本当に頭に来たらしいオルコットは机を叩きながらそう言っ  
つて、一夏も勢いでそれを受ける。入学早々我が友は血気が盛んで  
よろしいことだ。ま、俺は陰ながら応援してるからがんば

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、橘はそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

そうかそうか、勝負は来週か………え？

何か今、聞こえるはずのない言葉が聞こえたような。

「あの、織斑先生？聞き間違いだと思っんですけど、今俺も用意しておくようにとか言いませんでしたよね？」

「きちんとそう言ったつもりだが。お前もオルコットと戦ってもらうぞ」

「な、なんで」

「お前にも推薦があっただろう。それに先ほどの口論にも口を挟んでいたしな」

……………っ。

…ウソダンドドコドーン！！



## 第一話 入学とオーズと俺の欲望 part A (後書き)

あれ、一話に収めようと思ったのに収まりきらなかった(汗)というわけでこの試作小説は次回に続きます。

内容の方はいかがだったでしょうか…って、ひどいに決まっていますよね。まだ主人公のキャラも立ってないし。

感想等あればお気軽にお寄せください。続けてほしいという意見があれば(あるわけないけど)、そのうちセシリア戦の後の続きも書くかもしれません。

では、また次回。

## 第一話 入学とオーズと俺の欲望 part B

side 一夏

どうなることかと思っただが、とりあえず入学初日を乗り切った俺と映司は、現在朝食を食べに食堂に来ている。一週間は自宅からの通学だと聞いていたんだが、男のIS操縦者という事情もあり、昨日から寮生活がスタートしたのだった。2人しかいない俺達男子は当然同じ部屋に入れられたので、今もこうして一緒に行動しているわけだ。

「…にしても、視線を感じるなあ」

「完全に動物園の猿状態だな」

周囲から絶妙な距離感を保ってこっちを見つめている女子達に聞けないように俺がつぶやくと、映司もうんうんとうなずく。……外国に自分たちだけ取り残された気分って、まさにこういう感じなんだろうな。和食セットも受け取ったことだし、さっさと食べてここからおさらばさせてもらおう。…まあ、どこ行っただって女子はいるんだが。

「ん？あれは……」

ふと周りを見渡すと、見知ったポニーテールがゆらゆら揺れているのが見えた。

「おはよう、箒」

「っ!?!?」

近づいて声をかけると、箒はびくんと肩を震わせる。そんなにびくくりすることでもないと思うんだが…

「あ、ああ…おはよう、いち…織斑」

あれ、名字呼び?しかも一瞬名前呼びかけたのを訂正されたぞ。6年の歳月で妙な溝ができてしまったのだろうか。だとしたらちよつとシヨックだな。

「一緒に食べようぜ」

「あ、ああ…」

妙によそよそしい雰囲気を出しながらも、箒はそそくさと俺の向かいの席に座ると、ちらちらと俺の横に視線を向けて…ああ、そうだ

った。俺の隣にいるやつを紹介がまだだったな。

「紹介するよ。こいつは橋映司。俺の親友だ」

『親友』などという単語は普通は気恥かしくて使えないのだが、映司に関してだけは別だ。なにせ6年間も一緒に暮らしているわけだし、小さい頃は風呂で遊んだりもしていたから互いのほくろの位置まで把握している……かどうかは疑問だけど、まあとにかく俺の一番のともだ

「ええっ！？俺ってお前の親友だったの!？」

「……………」

…おい映司。篝がどうリアクションを取ればいいのかわからずに固まってるじゃないか。何とかしろよ。

「なるほど、篠ノ乃はやっぱりお堅い感じのキャラか。まあいいや、これからよろしくな」

「…ああ、よろしく……………」

フオローなしかよ！いいのかこれで、俺の幼馴染と親友の出会いはこのでいいのか？

「お、織斑くん、橘くん。隣いいかなっ？」

「へ？」

俺が映司の相変わらずのマイペースぶりに頭を悩ませているさなか、朝食のトレーを持った女子3名が声をかけてきた。

「ああ、別にいいけど」

「俺もいいぜ」

そう答えると、女子達はうれしそうに席に座っていく。同時に周囲が妙にざわつき出す。

「ああ、っ、私も早く声かけておけばよかった……」

「まだ、まだ2日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよー」

「なんですって!」

…ああ、うん、そうだよ。1年生が8名、2年が15名、3年が21名自己紹介に来たよ。名前を覚えるだけで一苦労だった。今答えても的中率は2割を切るだろう。ちなみに映司は『全員多串さんでいいんじゃない?』とハナから覚えることを放棄していた。俺の親友はいつだってテキトーだ。

「あ、そついや篤」

「な、名前で呼ぶなっ」

「……篠ノ乃さん」

「……………」

名前で呼ぶなと言われたので名字で呼んだら、今度はむすつとされてしまった。なんだろうこの妙な雰囲気。どんな感じで旧交を温めればいいんだろう。

「ねえ、織斑くんって篠ノ乃さんと仲がいいの？」

女子のひとりがそんなことを聞いてきた。よくこんな堅い空気を作りだしている俺達を見てそんなことが言えるな。

「まあ、幼馴染だし」

俺が何気なくそう言った途端、周囲がざわざわとどよめく。

「え！？…それじゃあ、もしかして橘くんも？」

「俺は違うぞ。篠ノ乃が引越したすぐ後に千冬さんに拾われたみたいだからな」

「へえ、そうなんだ……って、拾われた!？」

映司がどうでもよさそうに話したことに再び周囲がざわめく。まあこれは当然だろうな。

「俺が住む場所もなくてふらふらしてたところを千冬さんが引き取ってくれたんだよ。そんなに驚くような話でもないだろ」

いや、驚く話だろ。10歳が路頭に迷ってる時点でそのうちあるよ  
うなことじゃないだろうに。」

「道理で仲がいいわけね……」

「ISを動かせるのと何か関係あるのかな？」

「織斑×橘……いや、橘×織斑かしら」

周りの女子の声が聞こえてくる　　って最後のやつ！明らかに気  
色悪いこと考えてないか！？

「……織斑。私は先に行くぞ」

そうこうしているうちに、ほぼ黙って食べ続けていた箸は食事を終  
え、すたすたと行ってしまった。……うーん。早く打ち解けたいん  
だけだなあ。

side 映司

というわけで四時間目の授業終了。……え？何が『というわけ』なんだって？いいだろ、一人称交代する時に場面が飛んだって問題はないはずだ。決して間の描写が面倒だと思ったわけじゃないぞ。

「あ、おーい橘くん」

「ん？」

急に声をかけられたので振り返ると、なんだか袖丈が妙に長い制服を着た女子が立っていた。確か昨日寮の部屋に来ていた、ええと、名前は

「ああ、多串さん8号か。どうした？」

「全然違うよー。私の名前は布仏本音だよ」

あっさり訂正された。まあそりゃそうだよな、俺昨日部屋に来た女子多数のこと、面倒だから全員『多串さん+（自己紹介してきた順番）』で覚えてるし。

「橘くん。一緒にお昼食べようよー」

「俺と？一夏じゃなくていいの？」

まあ、その一夏は先ほど技をかけられながらも篠ノ乃を食堂に連れていったので今はないが。ついていくのも無粋だと思ったから俺はここに残っていたのだ。うん、空気読めるな、俺。

「なんとなく織斑くんより橘くんの方が話しやすそうだったからね」

よくわからんがそういうことらしい。俺としてもひとりで食うのは寂しいと思っていたところだから、断る理由も特にはない。

「よし、じゃあ行こうぜ」

「お〜」

「それにしてもすごいねー。橘くんも織斑くんも専用機がもらえるなんて」

食堂にて昼食を食べながら、俺と布仏は他愛のない話に興じていた。

「ああ、なんかすごいことらしいな。よくわからんが、悪い気はしねえよ」

「そういえば織斑くんと一緒に暮らしてたんだってねー。2人そろってISを起動できたことと関係があるのかな？」

「俺が知るわけないだろ。触ったら動いちまっただけなんだから」

「あはは、そうだね」

うん、こういうのほんとした雰囲気の子と話すのも悪くはないな。中学の時に話してた女子といえば大概が鈴で、布仏とは正反対のよくなやつだったからなおさら。なんて考えていると、脳内の鈴がギロツと睨みつけてきた。あいつ、俺が他の女子の話をしだすと

たまーに変に機嫌が悪くなる時があったんだよな。理由は今でも不明のままだ。

「ねえねえ、千冬先生って、家ではどんな感じなのかな？」

布仏が聞いてきた質問は、さっきの休み時間に一夏も他の女子から問われていたことだった。あの時は教室だったから千冬さんの妨害が入ったが、ここならさすがに大丈夫だろう。

「ああ、実はあの人家では」

パンツッ！

「橘、ちよーどいいところにいたな。少し話がある。急いで昼食を終わらせる」

あなたこそよくもまあ都合よく俺のそばにいたね。ひよっとしてエスパー？自分のプライベートがばらされそうになると虫の知らせでわかるとか。ていうかもしかして出席簿は常に攻撃用に携帯しているんですか。

ともかく、千冬さんに突然呼び出された俺は急いで飯を食べ終わると、布仏にあいさつしてから食堂を出たのだった。

「それで、話つてなに…なんですか？」

危うく家と同じ感じで話してしまいそうだったのをあわてて訂正する俺。これ以上頭を無駄に叩かれるのはごめんだ。

「ああ。お前の専用機についてなんだが……」

あれ、千冬さんにしては随分と歯切れが悪いしゃべり方だな。何かあったんだろうか。

「入学試験の後、遺伝子検査を行ったのは覚えているな」

「あ、ああ、はい。男がIS動かしたって大騒ぎでしたからね」

もしかしてオトコンナなんじゃないかというわけのわからない疑い

をかけられたりもしたが、その検査によって俺と一夏はれつきとした男だということが証明された。

「その検査の結果を見た私の知り合いが、お前には是非薦めたい機体があるらしい」

「はあ……………」

正直ISについてはさっぱりなので、そう言われてもどう受け取ればいいのかわからない。が、千冬さんの様子から察するに…

「ひょっとして、その機体がいわくつき、とか？」

俺の予想は当たっていたらしく、千冬さんはうなずいて、話を続ける。

「私も詳しいところまでは把握できていないんだが、なんでも『800年前の遺産』を取り入れた機体らしい。今までに誰も起動できなためしがないが、お前なら動かせるだろうとのことだ」

800年前？日本は鎌倉時代あたりだよな。そんなころの遺産に一体どんなものがあつたって言うんだ？しかも俺なら動かせるって…  
…ますますわけがわからん。

「一応、信用できる人間が危険性はないと言っているのだが……機体が例外中の例外だ、予想外の事態が起きる可能性もあるかもしれない。……それでもかまわないか」

ああ、そうか。千冬さん、俺を心配してくれてるんだ。他人にも自分にも厳しい人だけど、心の中はとても優しい。俺はそのことを身をもって知っている。

だから。

「いいですよ。例外的ってことは、多分その機体強いんだろうし。俺は全然平気です」

そんな優しい人がわざわざその機体を使う選択肢を用意してきたんだ。きつと大丈夫なんだろう。なら、強くなれる、前に進むことのできる道を選ぶのにためらいはない。

「……そうか。ならいい」

俺の返事を聞くと、千冬さんはゆっくりとうなずいた。なんだか微妙な表情をしているところを見ると、やっぱりまだ心配しているんだろうか。なら、ここらで少し気を紛らわせてあげよう。

「それにしても、やっぱり優しいねえ千冬さん。わざわざ俺を心配して聞いてくれるなんて持つべきものは立派な姉」

パンツ！

「学校では」

「すみませんでした、織斑先生」

…気の紛らわせ方、間違えたかな。

ISのことを教えてもらうはずなのに、なぜか放課後剣道場へ来いと等に言われていた俺は、素直にその指示に従って、久しぶりに剣道の試合に興じた。

…のだが。

「どづいづことだ」

「いや、どづいづことって言われても……」

ギャラリー満載の中で、あっさり幕に一本負けをした俺は、対戦相手から怒られていた。

「どづしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな？」

「中学では何部に所属していた」

「帰宅部。映司とお互いを高め合って見事3年連続皆勤賞だ」

まあ、実際は家計を助けるためにバイトしてたんだけど。

「  
なおす」

「はい？」

「鍛え直す！IS以前の問題だ！これから毎日、放課後3時間、私が稽古を付けてやる！」

「え。それはちょっと長いような  
ていうかISのことをだな」

「だから、それ以前の問題だと言っている！」

うわあ。すげえ怒ってる。これはもう何言っても聞いてくれない気がするな。

「情けない。ISを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど……悔しくはないのか、一夏！」

あ、名前で呼んでくれた？…って、今はそんなことを気にしている場合じゃないか。

「そりゃ、まあ…格好悪いとは思っけど」

「格好？格好を気にすることが出来る立場か！」

その後も幼馴染の説教はしばらく続き、言いたいことだけ言って等は更衣室に引っ込んでしまった。

しかしまあ、強くなったな、箒。昔は俺の圧勝だったんだけど。

「織斑くんてさあ」

「結構弱い？」

「ISほんとに動かせるのかなー」

「そっだよなー。一夏の奴、先が思いやられるよなー」

ひそひそと聞こえるギャラリーの女子達の落胆した声……って、ちよっと待て。今男の声がひとり混じってたぞ。

「なんであいつは違和感なく溶け込んでんだよ…」

まるでそこにいるのが当然のごとく、女子達の間でひそひそ話をしている映司を見て、俺は思わずため息をつく。一応、あいつも代表決定戦に参加する人間なんですけど。なんで他人事みたいにしてるんだ。

「そつえば、橘くんは準備とかしてるの？」

「よかつたら私がISのこと教えてあげようか？」

「あー？準備なんて面倒くさいことやるわけないだろ。んなことしなくてもなんとかなるって」

「え？でも、相手はあのセシリアだよ？」

「だーかーらー。相手が誰とか関係ないっての。俺が勝たなくても一夏が勝てばオルコットの鼻っ柱を折ることはできるんだから。というわけで、俺は部屋でジャンプ読むから帰るわ。頑張れよお一夏あ」

女子のありがたい申し出をなんのためらいもなく断り、鼻歌を歌い

ながら寮に帰っていく映司。そのやる気のなさに、周りの女子は唾然としている。

(映司のやつ、いつも通りだなあ)

とにかく面倒くさがりで、労力や時間がかかりそうなことは体よく他人に押し付けてしまう。それが橘映司のスタンスなのだ。よくあいつが俺がモテるとかどうの言ってくる時があるが、仮に俺の方が女子に人気があったとしても、それは俺がモテるのではなくあいつの態度に問題がある、というのでファイナルアンサーだろう。あんな向上心のかけらも見えない様子を見せといて人気が出るわけもないからだ。

もちろん、俺や千冬姉をはじめ、映司をよく知る人間はあいつの本質をわかっているんだけどな。

「……っと、人のこと気にしてる状況じゃないよな」

箒に完敗し、久しぶりに底辺の気持ち味わった。でも、底辺ならあとははい上がるだけだ。

「トレーニング、再開するか」

俺は、こんなところで負けてはいられないのだから。

## 第一話 入学とオーズと俺の欲望 part B (後書き)

まだセシリア戦まで到達しない……原作そのまま写してる部分があるから文字数が増えているんじゃないかな。

一応、オーズに関してはただのISではないという設定にしています。ある意味『もうひとつのオーズの世界』みたいな感じにしようかと。

映司のキャラがうまく表現できないのがもどかしい……

感想などあれば、どうぞお気軽にお寄せください。作者が喜びます。

では、また次回。

## 第一話 入学とオーズと俺の欲望 part C

side 映司

「ん」

IS学園に入って迎えた2回目の夜。目覚ましなどをかけていたわけでもないのだが、俺の意識は自然に覚醒した。

時計を見ると、時刻は午前4時。まあ、夜というより早朝だな。少し離れたところで一夏がぐっすり眠っているのに目を向けつつ、俺は近くに置いてあったジャージを手に取り、おもむろに着替え始める。

「よし、準備完了っつ」

男の着替えなんてそう時間のかかるものでもない。起床2分で支度を終えた俺は、同居人を起こさないようにそっと部屋を出て、そのまま外に向かった。

「ん」。目が覚めるなあ」

気温が上がり続ける春ではあるが、まだまだ朝の風は冷たく感じら

れる。…ま、こんくらいの方が汗もそれほどかかずにすむだろう。

…え？何をするのかって？そんなもん、早朝のランニングに決まってるじゃないか。

「さてと、じゃあ早速走りますか」

最初は眠った体を目覚めさせるようにゆっくりのペースで、その後徐々にペースを上げていく。うん、いつものことながらこの時期の朝の風を浴びるのは気持ちいいな。夏なんて暑くてえらいことになる。

この習慣は織斑家で暮らすようになった時からずっと続いている。きつかけは…確か、とにかく何かを頑張ってみようって気持ちになったことだったか。なんかよくわからないけれどすごく強いらしい千冬さんと、剣道に励んでいる一夏。そんな2人を見て、わざわざ拾ってもらった俺が何もしないのはおかしい気がしたんだと思う。そこで、特に準備を必要としない『とりあえず走ること』が頭に浮かんだんだらうな。…我ながらなんて単純な思考。

それ以降、一夏が剣道をやめてアルバイトをやり始めてからも、俺は朝のランニングをやめなかった。もちろんバイトも行った。だから多分、いまさらやめようとしてもやめられないだろう。そう考えると、朝の6時まで目が覚めなかった昨日はよっぽど疲れが溜まってたんだらうな。

足を軽やかに動かしながら、俺はランニングコースを適当に設定していく。学校を出るのはよくないだろうから、やっぱり校庭をぐるぐる回るのがよさそうだ。

それにしても、当然というべきか、こんな時間から外に出ている物好きなんてさすがに俺ぐらいらしく、人影はどこにも見当たらない。部活の朝連ももつと後だろうし

とか考えながら曲がり角を曲がったその時。

「……あ」

「……ん」

朝っぱらから頭にタオル巻いて竹刀を振っている物好きと、ぱったり出くわした。

こんな早朝から外に出ている人間なんてそうはいないだろう……と  
思っていた矢先、ひとつの影　　男の人影が視界に入ってきた。

一瞬胸が高まったが、そこにいたのは2人しかいない男子のうちの、  
幼馴染ではないほうだった。

「…お前か」

「なにその露骨にっかりしてますって顔。一夏じゃなくて悪うい  
ざいましたね」

「なっ…！べ、別にそういうわけじゃ……」

顔が熱くなるのを感じながら私が否定すると、橘はそれを面白がる  
ような表情になる。

「安心しろ、詮索するのはかわいそうだからやめといてやる。それ  
にしても、こんな早くから剣道の練習なんて、随分熱心なんだな」

「己を律するためには当然のことだ。……お前こそ、こんな時間が  
らランニングか？」

昨晚、周りの女子が『橘くんは面倒くさがり』などという内容の話をして、いたのを小耳にはさんだのだが。

「ああ、まあ……一応、昔からの習慣なんだな。このまま6時半くらいまで、走ったり腹筋したりするつもりだ」

そこまで話すと、橘は頭をかき、何かを言おうとしつつものどから出ない、というような顔つきになる。

「なんだ？言いたいことがあるならはつきり言え」

「ああ……その、あれだ。俺がこうして早朝ランニングしてるの、秘密にしといてくれ」

「なぜだ？人に知られて困るようなことでもないだろう」

むしろ逆に好印象を与えることになるだろうに、目の前に立つ男はそれが嫌らしい。

「いや、俺基本面倒くさがりだからよ。なんか頑張ってるのを知れると……なあ？なんか嫌だろ？」

……残念ながらまったく理解できない。

「子供のよつなことを言うやつだな、お前は」

「うるせえつ。俺もお前もまだガキだろうが。……とにかく、内緒にしといてくれ」

「まあ……構わないが」

よくわからないが、ここまで真剣に頼まれて断ることもない。そう思い、私は首を縦に振る。

「サンキュー。んじゃな」

私の返事に満足した橋は、そのまま軽やかに走り去っていった。……なかなか綺麗なフォームだ。さっき言った量の運動を朝に毎日こなしているのだとしたら、それなりに骨のある人物ということなのだろう。

「あいつの親友というだけはあるな　　って、これでは私が異常に一夏を持ちあげているようではないかっ」

思わず口から出た言葉に自ら訂正を加えながら、私は竹刀を握る手にぐっと力をいれる。

「……きちんとあいつを鍛え直さなければ、な」

side 一夏

そして翌週、月曜。セシリアとの対決の日。

「なあ、箒」

「なんだ、一夏」

再会から一週間、俺と箒は名前で呼び合う仲に戻っていた。6年の溝は案外浅かったのかもしれない。喜ばしいことだ。

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

そう。ひとつ、問題が解決していない。

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……………」

「目をそらすな」

あれから6日、篤は剣道の稽古をみっちりつけてくれた。問題は、それしかしてくれなかったということだ。

「し、仕方がないだろう。お前のISもなかったのだから」

「そうだぞ一夏。落ち着け落ち着け。こういう時は冷静になるのが一番だ」

篤につめ寄る俺をなだめるのは、同じく今日セシリアと戦うことに

なっている映司だ。

「そうは言ってもな…大体、俺とお前の専用ISとやらもまだ来ないんだぞ？これで落ち着けて方が無理だろ」

「それでもだ。ここでわめいたって状況は変わりやしねえんだよ」

う…確かに映司の言つとおりだな。さすがは親友、こいつは昔から土壇場になると冷静で頼もしい

「さあ、わかつたら落ち着いてオルコットとのSMプレイを耐え凌ぐ策を考えるぞ。……いや、ひよっとするともっと上級者向けのプレイが来るのか……？」

「お前が落ち着けえ！！」

訂正。全然冷静じゃありませんでした。というか手を抜いたりしない限り、負けた方が奴隷とかそんな約束してないからな！

「……一夏。あいつはいつもああなのか」

「…いや、本当にいざって時は頼りになる奴なんだぞ？そこはわか

「つててくれよ？」

呆れたような目をして映司を見る筈に弁解する俺。自分と仲がいい人間同士、仲よくしてもらいたいのは当然だからな。

「お、織斑くん、橘くん！」

と、いつも以上に危うい足取りでやってきたのは副担任の山田先生だ。よく見ると、その後ろから千冬姉も歩いて来ている。映司も危険な妄想を一時停止してそっちの方に目を向ける。

「どうしたんですか、山田先生？」

「あ、はい！来ました！織斑くんと橘くんの専用IS！」

え？

「織斑、橘、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でものにしろ」

はい？

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせる」

あの？

「早く!!」

口をあんどぐり開けたままの男2名に降り注ぐ女性3名のきつい声。

「……行くか、一夏」

「ああ……」

異常にテンションの低い言葉を交わして、俺達はピット搬入口まで移動する。

s i d e 映司

はい？

そこには2つのISが待機していた。ひとつはどこまでも飾り気のない白の機体。

「はい！織斑くんの専用IS『白式』です！」

というわけで、そっちは一夏のものらしい。で、もうひとつ、白式の隣にあるのが……

「……何これ？信号機？」

おそらく頭が入るであろう位置 赤。胴体 黄色。脚 緑。腰には3色のメダルつぼいものがはまっている。なんだこのカラフルなデザインは。ちよっと隣の白式にわけてあげたいくらいなんですけど。

「それがお前の専用機『オーズ』だ」

「オーズ……？」

千冬さんが言ったその名を、俺は頭の中で反芻する。……とりあえず触れてみるか。そう考え、俺は機体に手を置く。

瞬間、俺の頭の中へ情報が流れてくる。初めての時のようなビリッとした感じじゃなく、まるで、知っていることが当然のように、スムーズに理解が進んでいく。

「背中を預けるように、ああそつだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

千冬さんの言うとおりに動く俺と一夏。すると、まるで最初から俺の一部であったかのように、『オーズ』が体に装着される。

直後、視界が鮮明化され、その他の感覚も研ぎ澄まされていく。オーズが伝えてくる数値やらも理解できる。…まったく、こんなすごいものを作りあげた人　篠ノ乃の姉ちゃんらしいが、その人はマジで天才だよな。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、映司、気分は悪くないか？」

おお、すげえなこれ。いつもはわからん千冬さんの微妙な声の震えまで感知できるぞ。まあ、名前で呼んでいる時点で俺達を心配してくれていることは伝わってくるんだが。特に俺の機体は例外的らし

いし。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「俺も今のところ問題なしだ」

「そうか」

ほっとしたような声を出す千冬さん。…そういえば、どっちが先に戦うんだ？

「まずは橘から戦ってもらおう。織斑は一度装備を解除しておけ」

…俺か。一夏の方はとりあえず起動の確認をただけだったみたいだな。

「さーて。それじゃ、いっちょやってみっか！」

「あら、逃げずに来ましたのね」

『ブルー・ティアーズ』という名前のISに搭乗したオルコットは、いつも通りの態度で俺を出迎えた。随分でかい武器を抱えているもんだ。ISではそれが普通とわかっていても、自分の背丈より大きな銃器を扱うってのは俺の常識を越えている。

「ああ、面倒だけど、臆病者のレッテル貼られるのは癪に障るからな」

ついさっきまで負けた後のことを考えていたとは口が裂けても言うまい。

「最後のチャンスをおげますわ」

「……なんだ？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

言いながら、オルコットのISが射撃モードに移る。……そろそろ

来るか。

「いいこと教えてやるよ。日本ではな、ボロボロになるのが最後まで戦うのが様式美なんだよ」

「そう？覚えておきますわ。では」

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填　　つてうるせえ！言われなくても雰囲気わかるわ！

「お別れですわね！」

「うおっ！？」

キュインツ！という音と同時に閃光が一発襲ってくるのを、間髪で避ける俺。くそ、いちいちオーズの解説に神経傾けてる余裕がねえぞ！

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲<sup>ワルツ</sup>で！」

「悪いな、俺が踊れるのは阿波踊りだけなんだよ！」

冗談言ってる場合じゃないのに思わずくだらないことが口をついて出てしまうのは俺の癖だ、許せ。

とにかく、この降り注ぐ弾丸の嵐をなんとかしなければ。できる限りは避けているが、当然いくつかが当たってダメージが蓄積されていく。つか、ビービービーアラートがずっとうっとうしいですけどお！

「装備、一番いいのを頼む！」

オーズに尋ねると、現在展開可能な装備の一覧が現れる。って、あれ？

「何もないだ と!？」

ふざけんな！おかしいだろ、お坊ちゃまの某赤髪親善大使でも最初から木刀くらいは装備してたぞ!？素手で冒険に出かけるとか愚の骨頂だろうが！別に俺は冒険行かないけど！

「っと、くだらねえことに頭使ってる時じゃなかった！」

こうなりゃ素手でもなんでもなんとかしてやらあ！

side 一夏

試合開始から約40分。

「うわ、まだしのぐのかよ、映司のやつ」

決着はまだ着いていない。開始からずっとセシリアのペースなのは誰の目に見ても明らかなのだが、それでも初戦闘でここまで粘れるのもすごいんじゃないかと思う。

「逃げに徹しているというのもあるが、よく凌げるものだな……」

冪も同じことを思っているらしく、そんなことをつぶやいている。

「映司は反射神経いいからなあ。……けど、さすがに武器がないと辛いよな……」

「装備がないISなど用意するはずはないと思うのだが……」

そう。映司のIS『オーズ』は、どうも現在武器が用意されていないらしい。いくら初めて乗ったとはいえ、40分も経てばさすがに装備にまで考えが及ぶはずだから、おそらくそれで間違いない。そんな状態であの明らかに銃撃型のISに勝つのは無茶というものだろう。

「お、織斑くん」

そんな時、ふと後ろから声をかけられる。この頼りなさげな声は山田先生のものだな。

「あの、そろそろ橘さんとオルコットさんの勝負が終わりそうなので、織斑くんも準備してもらいたいですけど……」

「あ、ああ、はい。わかりました」

多分もうじきオーズのシールドエネルギーが底をつくのだろう。俺も初戦闘なわけだし、早めにISを装備しておいたほうがいいよな。

「じゃあ、早速こっちに」

と、山田先生が言いかけたその時。

空中を縦横無尽に逃げ回るオーズに、『変化』が起きた。

side 映司

「やっぱり素手無理iiiiiii!!」

不可能だわこれ、認識が甘かった!試合が始まって40分、逃げるだけで精一杯だ。シールドエネルギーは残り76、実体ダメージもそれなり。正直負け確定の状況だ。

……ちくしょう、あの『ブルー・ティアーズ』とかいう4つのピットの仕組みについては大体見切っただけだなあ。後はなんか武器さえあれば

「もう40分。このブルー・ティアーズを前にして、初見でここま  
で耐えたのはあなたが初めてですわね。逃げに徹しているとはいえ、  
褒めて差し上げますわ」

武器さえ、あれば

お前の望むものはなんだ？

……は？何だ今の野太い声。オルコット…なわけないよな。

お前の欲望。欲望はなんだ？

欲望？欲望って、夢とかそういう類のことか？

そつだ。お前の欲望を言え。

……あの、この声はなに？俺の頭がおかしくなったの？それとも  
オーズがしゃべってんのか？

欲望を言え。

だあつ、もうつるせえなあ！答えりゃいいんだろ、答えりゃ！

ええつと、夢、ねえ……正直、持ち合わせていない。

『なんのために生きるかわからないのなら、これから見つければいいだろう？』

千冬さんに拾われ、そんなことを言われてから、自分のやりたいことを見つけようといういろいろなことに挑戦したこともあった。だけど、どれもピンとこなかった。それは俺のももとの面倒くさがりな性格に起因しているのかもしれないが、とにかく、打ち込めるものは見つからなかった。

……俺は今、こうしてISを動かしている。防戦一方だけど、それでもさつきからものすごいアクロバティックな動きができていて、相手の武器の性質まで見極めることができる。間違いなく、今までの俺じゃできなかったことだ。正直結構興奮している。

そして、目の前の相手はもっとすごい。あのとんでもない武器を軽々と扱っているのだから。けど、そのオルコットですらまだ15歳。大人の中にはこれ以上の技術を持つ奴なんてたくさんいるだろう。

俺も、これから頑張れば、そんな風になれるかもしれない。

今まで見えなかった何かが、見えるかもしれない。

だったら。

「俺の欲望は…人生かけてもいいでかい欲望を見つけないことだ。そのために、とりあえずは目の前の敵を倒したいってところだな」

いいだろう。……その欲望、解放しろ

直後、俺の機体が、その形を変えていく。

「な  
」

オルコットが目を見張っている。俺も何が何だか

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ、タトバタ・ト・バ！』

奇妙な歌とともに、『オーズ』は、その真の姿を現した。

第一話 入学とオーズと俺の欲望 part C (後書き)

終わらなかった……次回こそ完結させます。  
感想などあれば、お気軽にお寄せください。

では、また次回。

第一話 入学とオーズと俺の欲望 part D (前書き)

今回でとりあえず終わりです。

## 第一話 入学とオーズと俺の欲望 part D

side 一夏

「な、なんだあれ……?」

いきなり映司の乗っている機体『オーズ』の姿が変わったことに、そしてその時に妙な歌が流れたことに、俺は呆気に取られてぽかんとしていた。

「どうやらファースト・シフト一次移行が終わったみたいですね」

「やはり今まで初期設定のまままで戦っていたんですね、橘は」

「ええ、なにせ時間がなかったものですから……これで装備も使えるはずですよ」

山田先生と筭の間でどんどん話が進んでいく。えっと、確か一次移行ってというのは……

「あっ！織斑くん織斑くん、それより急いでください！」

思い出したようにあわてだす山田先生。そういえば、俺は次に控え

ている勝負の準備をしなくちゃならないんだった。

手招きしながら相変わらずの危なっかしい足取りで走っていく山田先生を追いかけながら、俺は箒に向かって言葉を放つ。

「箒。行ってくる」

「……ああ。勝ってこい」

side 映司

「おお…なんか今までと全然違っぞ」

視界の鮮明さも、体に満ちる力の充実感も、先ほどまでとは比べものにならないくらい上昇している。オルコット曰く、この現象は『一次移行』というらしい。要はこの機体が俺専用になったってことだ。

まあ、そんな蘊蓄はこの際どうでもいい。

「オルコット」

「…なんですよ」

一次移行にともなって、俺の頭の中には再び大量の情報が流れ込んできた。それによると、この姿は『タトバコンボ』というらしい。頭がタカ、胸がトラ、脚がバツタ。略してタトバ。この名前を考えたのが誰かは知らんが、なんとというか超個性的なセンスの持ち主だな、間違いなく。

で、進化したことによって、ようやく武器が展開できるようになっただらしい。

つまり

「こっから先は、ずっと俺のターンだコノヤロー!!」

胸の部分が光り、同時に腕の部分にかぎ爪型の装備『トラクロー』が姿を現す。

「ふん!いまさら一次移行したところで、わたくしのブルー・ティーズには」

「勝てる…かもしれねーよ?」

俺がそう言った直後、オルコットの操るビットのひとつが切られ、爆散した。

「なっ!」

「40分も逃げてりゃ、さすがに弱点くらい見抜けるってーの」

簡単な話だ。あいつのビットは、あいつが直接命令を送らないと動かないし、もつといえはその時あいつはそれ以外の攻撃ができない。いやほんと、アクションゲームみたいな短所って現実にあるものなんだね。



少しオルコットから距離を取り、腰にあるベルトから、そこにはま  
っている3枚のメダルの真ん中を引っこ抜く。

「替えのメダルは…ここか」

腰の左手が当たる部分についているメダル入れのようなところに黄  
色のメダルを放り込み、代わりに緑のメダルを取り出して、ベルト  
の真ん中に挿入。

最後に装備されているスキャナーでスキャンして

『タカ！カマキリ！バツタ！』

胸をカマキリに変えた『タカキリバ』へフォームチェンジ完了。  
…  
つて、結構手順が煩雑だな。

「また姿が変わりましたの！？そんな、ISは原則変形をしないは  
ず……」

驚くオルコットだが、俺はISの仕組みなんて知らんからその辺の  
ことはどうでもいい。使える力は使っただけだ。

カマキリの能力は、もちろんカマキリの鎌を装備できることだ。よし、ちゃんとリーチが伸びたな。…というか、こっちの方がはるかに使いやすいぞ。

戦いはノリのいい方が勝つ、とはよく言ったもので、波に乗った俺は早々に残りのビット2機を撃破、そのまま隙のできたオルコットとの間合いを詰め

「 かかりましたわ」

セシリアがにやりと笑う。

「 おあいにく様、ブルー・ティアーズは 」

「 あと2機ある。知ってるぞ」

オルコットの腰部から広がるスカート状のアーマーが動くか動かないかのところで、カマキリの鎌がそれを切り裂く。予想だにしていなかった攻撃に、オルコットは驚きを隠せない。

「ど、どろして……」

「あいにくと俺の機体は目がよくてね。あんまり見えすぎるから今の突起の中身がミサイルだっていうのも透視でまるわかりなんだ。まさに鷹の目ってとこだな」

ひょうひょうと語る俺だが、内心では『あぶねー！ギリギリまで気づかなかったあ！』とかビビりまくっていたのは秘密だ。

まあ、とにもかくにも、これで相手の武器はライフルだけ。お付きの護衛は姿を消した。

「さて、これで形勢ぎゃくて　？」

と言いかけたところで、俺はあることに気づいた。……ある、めちやくちや大事なことに。

「やべえっ！？一気に勝負決めないと！な、なんかないかなんか……！」

一瞬で相手を倒せるような必殺技的なもの……これだ！

『スキヤニングチャージ!』

スキヤナーでもう一度メダルをスキャンすると、体中のエネルギーがカマキリの鎌に集中していくのを感じる。　よし、これなら!

「ハアアアツ!セイヤ」

ビーーーーー。

『試合終了。勝者　セシリア・オルコット』

……………え?なんで?

俺と、そして向かい合っているオルコットは、互いにぼかんとバカみたいな顔をしたまま、しばらく動けずにいた。

side 一夏

映司とセシリアの試合の後、ほどなくして今度は俺とセシリアが戦い 結果として、負けた。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

千冬姉からの厳しい言葉を受け、俺はただうな垂れるしかなかった。そりゃそうだよな、武器の性質も知らないで使って自滅したんだから。格好がつかないとはまさにこの時のためにある言葉だ。

「……ええっと、映司は」

気になったので、試合開始以降言葉を交わしていない親友の居場所を聞いてみる。あいつも負けたってことは知ってるんだが、最終的に何がどうなったとか、そこまで詳しいことは聞いていないのだ。

「ああ、あっちの馬鹿ならトイレだ」

どうやらあいつも馬鹿認定されたらしい。出来ない弟達で申し訳ない限りです、姉上。

とかなんとか考えているうちに、トイレから戻ってきたらしい映司がやってくる。……えらく元気がないようだけど、何かあったんだろうか。あいつの性格上、負けたことをそこまで引きずるようなことはないと思うんだが。

「一夏……お前も負けたらしいな……」

「ああ。いやあ、まさか特殊攻撃を行うのに自分のシールドエネルギーが削られるなんてな、ははは……」

「お前はいいよなあ……どうせ俺なんて……」

……おかしい。明らかに映司の落ち込みようが尋常じゃない。

「どうかしたのか、映司？」

「どうもこうあるか！お前みたいに特殊攻撃の時だけエネルギーが減るんならまだいいだろ。俺のオーズなんて立っただけでシールドエネルギー消費してるんだぞ！」

つまりはこういうことらしい。

映司のIS『オーズ』は、ベルトに入れる3枚のメダルを入れ替えることで、それぞれ頭・胴体・脚の能力が変化するというものらしい。これだけ聞くと万能そうだが、問題は『タトバ』以外の姿でいると、毎秒2ずつシールドエネルギーが減少するということ。オーズの元々のシールドエネルギーが600だから、なんと突っ立っているだけでも5分しか持たない。さらに特殊攻撃『スキヤニングチャージ』を行う際にもエネルギーが消費される。タトバで50、それ以外だと75も持つていかれるらしい。

先ほどの試合では、胸をカマキリに変えて優位に立った映司がシールドエネルギーが尽きかけていることに気づき、あわてて特殊攻撃をしようとして敗北、という流れだったようだ。

「でも、タトバならシールドエネルギーは減らないんだろ？」

「俺はカマキリの方が使いやすいんだよ……織斑先生、やっぱりタカキリバを基本フォームにするってできないんですか？」

「無理だ。あらかじめそう伝えられている」

「うづぐう……」

うなだれる映司。そんなにカマキリがいいのか？トラだっていいところあるかもしれないじゃないか。知らないけど。

「えっと、橘くんにはもう言ってるんですけど、ISは織斑くんが呼び出せばすぐに待機状態から展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

どさっ。……この厚さ、まさにタ ンページだ。

「ああ、そうだ。橘、開発者からの伝言をひとつ言い忘れていた」

「…なんですか？」

「歌は気にするな」

「そこどうでもいいんですけどオ！…」

s i d e セシリア  
サアアアアア……

(今日の試合……)

シャワーを浴びながら、先ほどの戦いのことを思い出す。

(わたくしが勝ったのに……)

最初に戦った橋映司。次に戦った織斑一夏。どちらとの試合も、勝ったとはいえ腑に落ちないものだった。2人とも、最後の一撃が当たっていれば、確実にこの自分から勝利をもぎ取っていたことだろう。

その中で、一層気になるのが。

( 織斑、一夏 )

他者に媚びることのない、強い意志の宿ったその瞳は、いまだにわたくしの脳裏に深く焼き付いている。父のものとは正反対の、理想の瞳が。

「織斑、一夏……」

名前を口にする、不思議と胸が熱くなる。

知りたい。一夏のこと。

「……………」

side 一夏

翌朝のSHR。あり得ないことが起きていた。

「では、1年1組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

山田先生は嬉々としてしゃべっている。クラスみんなも盛り上がっている。暗い顔をしているのは俺だけだった。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

セシリアががたと立ち上がり、いつもの腰に手を当てるポーズを取る。

「まあ、勝負はあなた達の負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですからそれは仕方のないことですよ」

くっ、反論できない。事実負けたからな。

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして  
一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS  
操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠き  
ませんもの」

なんとというありがた迷惑。      ん？あれ？今俺のこと名前で呼んだ？…って、今はそんなことよりも。

「ちよつと待て。だからってなんで俺なんだ。映司もいるだろう」

そう言いながら隣の席の映司を見ると、まさに『ハア？』という顔をしてくる。

「え、なにお前、理由聞いちゃうわけ？そんなのわかりきってんだろっが」

いや、さっぱりわからないから聞いてるんだが。

やれやれと肩をすくめながら、映司はクラス全体を見渡す。

「クラス代表、俺より映司がいいと思う人ー」

「「「「「「はーい！」「」「」「」

クラスの9割の声が響き渡る　　え、なんで？

「というわけで、残念だったな一夏。俺よりお前の方がずっと人気があるんだ。どうだ参ったか！あっはっはっは！……あー駄目だ、明るく言ってもやっぱ悲しくなってきた……」

……ひとりで勝手に落ち込み始めた奴のことは、今は放っておこう。

ともかく、これは受け入れざるを得ないみたいだな……はあ。

side 映司

クラス代表が一夏に決まってはや数日。4月も下旬にさしかかり、俺もようやく女だらけのクラスというものに慣れてきたころの、朝の教室にて。

「おー、ダディくんだ。おはよ〜」

「待て、なんだその呼称は。どっから出てきた」

布仏の挨拶の中に紛れこんでいた謎の言葉を指摘すると、いつものほほんとした口調で解説が返ってくる。

「え〜と、橘くんをもじってみようとかかなりん達と頑張ってたら…  
…いつの間にかダディくんになってんだよね〜」

訂正、解説と呼べる代物ではなかった。つか複数人でそう親しくもない奴のあだ名考えるってお前らよっほど暇なんだな。

「もっとかっこいいのにはならないのか？よくわからんがすごく馬鹿にされてるような気がするんだが」

「え〜？いいと思うけどなあ〜。ダディくん」

「じゃあ代わりにお前のあだ名を考えよう。トロ子はどつだ。ぴったりじゃないか」

「どこかで聞いたことがあるよ、そのあだ名」

ほう、鬼塚を知っているか。なかなかやるじゃないか。

「ならノロ子にするか。『布仏』も『の』始まりだしちょうどいいな」

「う〜ん、それならいいかな〜。じゃあ『ダディくん』も決定ということで」

「待て待て待てえ！嫌だっって言ってるだろうが！大体なあ」

「ずいぶん仲のいいお友達がいるのね？」

「……………へ？」

いきなり会話に割り込んできた声を聞いた俺は、思わず間抜けな声を出してしまう。

驚くのも当然だ。今の声には聞き覚えがあるが、クラスの連中のもんじゃない。……………それどころか、この学園にすらいないはずの人間の声だ。1年前、中国に帰っていった、ツインテールで背が低い

「久しぶりねえ、映司？」

幼なじみの鳳鈴音が、妙に不機嫌な面で仁王立ちしていた。

次回！

鈴「だ、か、ら！あたしは別に一夏が好きとかそついうわけじゃないんだってば！」

映司「あーはいはい、照れなくてもいいから」

一夏「まさか鈴が対抗戦の相手だなんてな……」

第1話「一夏は私が教える」

セシリア「いいえわたくしが」

千冬「橘、支給された新しいメダルだ」

映司「オツケー。早速使ってみますか！」

第2話「幼なじみと対抗戦と侵入者」

鈴「あたしが本当に好きなのは……」

続かない。

## 第一話 入学とオーズと俺の欲望 part D (後書き)

というわけで、最後は次回がないのに次回予告なんてつけてみました(笑) もし続けるのならこんな感じで話が展開していく予定です。

ここまでこの駄目作者の作品、それも途中で終わること確定の試作を読んでくださった皆様(特にお気に入り登録してくださった方)、本当にありがとうございます。いかがだったでしょうか。……って、ここまでじゃなんとも言えないですよ。頭の中の構想では、これから映司のメダルも増えていって、やがてはコンボも という感じになっているんですが、今は書く時間がないので断念します。

最初にも言ったことですが、もし「続きが読みたい」という方がいらっしゃれば、感想で知らせてくださるとうれしいです。ある程度そのような感想が来れば、作者の受験が終わる来年以降、正式な連載作品として執筆するかもしれません。

では最後にもう一度、本当にありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4393t/>

---

バカとメダルとIS学園（試作）

2011年6月3日22時38分発行